# 「つぶやき」から始まる交流促進

ワンポイント・アドバイスはおわかりになりましたか。もう少し伝えたいことがあります。

いくつもの課題解決支援講座に取り組んでみてわかったことは、最初の準備での話し合いに苦労することです。どんな会議でも、すぐに活発な意見が出たり、いいアイデアが出るものではありません。公民館では、学校のような職員会議がない場合もありますので、よけいに意見を言い出しにくいものです。

そんな状況を打開するのは、公民館職員の「つぶやき」です。なにげない一言です。では「つぶやき」はどこから生まれてくるのでしょうか。先に、公民館の困りごと＝地域課題ではない、と述べました。でも職員が地域課題だと思われるのはなぜでしょうか。それは公民館利用者との接点があるからです。急に思いつくわけではなく、日頃の利用者の皆さんとの会話から、「つぶやき」が生まれてきます。「つぶやき」の中に課題の手がかりが隠されていたりします。公民館にとって、立ち話やお茶飲み話は、課題発見の糸口になります。ふだんからの公民館職員と利用者とのコミュニケーションをはかることが大切です。

利用者との間であれば、職員が意識的に声掛けをしていく、といった行動をとればすむのですが、住民相互では難しい場合もでてきます。だから課題解決支援講座では、コミュニケーションを目的に入れて企画していきます。しかし、交流やコミュニケーションだけを目的にしたら、どれだけの人が集まってくるでしょうか。ここが難しいところです。

参加者は、テーマの魅力で集まってきます。コミュニケーションを目的に集まってきているわけではないのです。コミュニケーションの促進は副次的な産物なのです。だからこそ工夫が必要なのです。アイスブレイクはもちろん、カフェコーナーの設置、一品持ち寄り、食事を介しての交流等々、いろんな企画をプログラムの中に組み入れると交流が促進されていきます。

「地域課題解決支援講座」…といっただけで硬い感じがしてしまいます。だからテーマやタイトルにも気配りをしてみましょう。わかりやすく親しみやすく、なるほどと思えるようなキャッチコピーを考えてみましょう。

講座が面白ければ、コミュニケーションもしだいにはかられていきます。面白くなければ、コミュニケーションもしぼんでいきます。そんな関係です。コミュニケーションがはかられていけば、参加者みなさんも「つぶやき」を出してくれます。参加者の「つぶやき」は、一人ひとりが課題解決に興味を示した瞬間なのです。

# 地域を知るための工夫

課題解決支援講座では、地域を知ることがまずは大事になります。地域を知らずして、地域課題はありえません。準備の過程で、ぜひ「まちあるき」を関係者でしてみましょう。まちの雰囲気を知ることができ、まちの変化を感じることができます。

参加者が地域を知るためには、いくつかの方法があります。一つは、「調査」、もう一つは「まちあるき」です。

「調査」では、高齢者の気持ちや学習ニーズが知りたい、新住民の意識を知りたい、住民の地域づくりへの関心を知りたい等々、いろんな調査を手掛けてきました。学術調査ではないので、参加者の皆さんとの協議で一緒に質問項目を作成します。つまり自分たちの知りたいことを質問項目にしていきます。それを調査し、集計・分析して、その結果について学び合い話し合います。調査結果の分析は、専門家にアドバイスをお願いします。

「まちあるき」も大変人気のある方法です。健康にいいから、みんなと一緒に歩くと楽しいから、新しい地域の発見があるから等々、理由は様々です。講座では、カメラやタブレットをもって歩き、想い出の場所を撮影し、最終回に写真を見ながら、発表会を企画します。想い出と一緒に語ってもらいます。これは、地域の「記憶の共有化」とでもいうような、一人の地域の想い出をみんなで分かち合うといった取り組みです。公民館に写真を飾って地域全体で共有化する工夫をすると、「地域の記憶」になっていきます。

防災講座では、ハザードマップづくりに取り組んでみました。集落の白地図をテーブルに広げ、消防団員や自治会の役員たちが、「ここは水が出る」「ここは危ない」など、次々と「つぶやき」が発せられます。「なんとかしないと」という気持ちが溢れています。危ない箇所を実際に見て回って、避難計画やタイムラインを立てていきます。

子どもたちにも活躍してもらった企画もありました。たまたま国勢調査の年だったので、「大良子ども調査員」と名乗ってもらい、地域のいろんな世代の方にインタビューをしてもらいました。保護者の方にも協力していただき、一緒に回ってもらいました。子どもが訪ねて来てくれる、子どもの声が聞こえる、それだけでも地域の方にとってみると嬉しいものです。とても喜ばれました。

地域を知る企画は、モチベーションを高めてくれます。「知っていると思っていたことが、変わっていて驚いた、なんとかしなければ・・・」と思ったときが、地域再発見の瞬間です。

# 講座運営の手法のスキルアップ

講座を企画したあとは、実施の段階に入ります。講師を招いて講義をしてもらう。ワークショップを回してもらう。振り返りを行ったり、次回の準備をしたりと職員は大忙しになります。

忙しくなるのですが、講座を成功させていくためには、職員は労を惜しんではならないでしょう。なぜなら、課題解決支援講座の運営の要であり、課題解決にむけた住民の取り組みの底支えの役割を担うからなのです。

講座運営の要といったのは、二つの意味があります。一つは、なぜこの講座をやるのかを、参加者にわかりやすく伝えていかなければならないからです。講師にお任せするわけにはいきません。公民館としてもなぜ取り組むのか。毎回、参加者一人ひとりの心に届くように伝えていきましょう。

二つにはワークショップは、今ではどこの公民館でも取り組まれるようになりました。小グループに分かれてテーマについての話し合い学習をします。それを付箋紙や広用紙を使って、最後に意見発表し共有化していきます。誰もが参加でき、意見を言いやすくする手法だと思ってもらってもいいかと思います。しかしグループに分かれても、話し合いがすぐにうまくいくかというと、必ずしもそうではありません。誰かがファシリテートしなければなりません。そうなると、公民館職員が担うことになります。ファシリテートのスキルを身につけておくと、講座が進めやすくなります。

参加者は講座がない日にも公民館を利用します。そんなときに、講座の感想や期待を話してくれることがあります。職員から「どうでしたか」と声掛けをすると、一層いいでしょう。講座のときには話せなかったことを、つぶやくように話をしてくれます。それを聞き取っていくのは職員の務めです。次回の講座に活かしていく材料を話してくれているのです。

公民館職員は、体系的・専門的な研修がとても少ない職場です。一方で窓口の受付業務や電話対応、貸館対応、まちづくり協議会のお世話など、いろんな事務的処理が求められます。事務的な処理に追われていると、それが公民館の仕事だと勘違いしてしまいます。それでは、地域課題解決型学習ができないばかりか、地域づくりの糸口も見えてこないでしょう。

全国の公民館では、新しい手法が開発されています。こんなやり方があったのかと驚きます。自分をバージョンアップさせるために、専門的職員研修を重ねてスキルアップをはかる努力を続けていきましょう。

# 「チーム公民館」をめざして

課題解決支援講座では、いろんな関係機関や学校との連携をはかる努力をしてきました。まちづくり協議会などの地域団体や、自治体の関係部局や国の関係機関、学校や大学など、さまざまな機関・団体との連携をはかってきました。

今、地域を対象とする各分野でよく使われる言葉の一つに、「多機関・多職種連携」があります。これは、地域の中で「困り感」をもっている人がいたとすると、その解決のためには一つの行政部局だけではなく、いろんな領域と結びついて問題解決にあたっていかなければならないということを意味しています。例えば、「子どもの貧困」や「DV」への対応などが代表的なものです。

公民館でも、「多機関・多職種連携」がとても重要です。公民館は、とても小さな職場です。なんでもかんでもできるわけではありません。だからこそ、いろんな人の力を借りてやらなければ、地域課題解決型の学習講座の実施は難しいでしょう。

学校との連携も大切です。佐賀県は、一小学校区に一公民館体制をとっているところが殆どです。校区内にある学校との連携は大切なのですが、学校と協力しながら事業を展開している公民館がどれだけあるのでしょうか。実は、課題解決支援講座の実施を通して、公民館と学校との日常的な交流が少ないことがわかりました。

学校は、いま「チーム学校」へと変貌をとげつつあります。学校にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、いろんな人が入ってきていて、チームとして教育にあたろうという方向をめざしています。残念ながら、公民館にはそれだけの人的配置はできません。しかし地域を見渡してみると、いろんな人やいろんな機関・団体があります。

「チーム学校」ができるのであれば、「チーム公民館」もできそうですよね。公民館を核として「多機関・多職種連携」をはかっていくことはできないでしょうか。いろんな機関や団体が、公民館を介してつながりあっていく。これが「チーム公民館」です。

その役割は、誰もが地域で幸せを求めることができ、住み続けていくことができるように支援していくことです。そこに住む人々の暮らしや健康と生涯学習のコーディネーションの役割を公民館が果たしていく。みんなが地域で暮らす夢を描くことかでできるようになる。課題解決支援講座の取り組みは、その第一歩です。